

## 2008年度(平成20年度)東京都江戸東京博物館 都市歴史研究室シンポジウム

### 「江戸の水害—被害・復興・対策—」開催趣旨

昨今、地震・火事・洪水・津波など、世界各地で発生する自然災害のニュースが、新聞の紙面を賑わすことが多い。地球環境の変化の影響とは即断できないが、とくに洪水災害は頻発し激化しているといわれている。途上国のみならず、都市計画が不十分な地域では、天災というよりも人災とみるべきものも少なくない。

江戸は世界的にもあまり類例をみない大都市として発展した。「火事と喧嘩は江戸の華」といわれるほど、江戸では火事が頻発した。このことから江戸を「火災都市」としてイメージする向きもあるが、その一方で実は江戸は頻発する洪水のため「水害都市」とも言われているのである。事実、江戸は250年を通じて少なくとも100回以上の洪水に見舞われているのである。

江戸東京博物館都市歴史研究室では、平成21年3月14日にシンポジウム「江戸の水害」を開催した。本シンポジウムでは、「江戸の三大水害」のひとつとされる「寛保の大水害」を中心に、その被害状況と復興過程、および幕府の水害対策などといった点について考えてみた。

江戸における水害研究は、地震や火災研究などに比べ、必ずしも十分な蓄積があるとはいえない現状にある。また戦後における都市インフラの整備によって、水害を知らない世代が増加する一方、水害に対する危機感の希薄化がすすんでいる。また、こうした人々の意識とは逆に、治水技術は飛躍的に発達したけれども、ダムや堤防による治水にもはや限界があるのではないかという指摘も近年なされはじめている。

こうした現状を考える時、江戸時代の水害に関する調査研究の成果を提示し、100年に一度の洪水を想定して過去の教訓に学ぶことの大切さを再確認することは、災害そのものを知るだけではなく、防災や都市のあり方など、自然と人々との関わりを考える上で、新しい「ものの見方」を提示できるのではないだろうか。

こうした問題関心のもと、シンポジウムでは5つの報告を用意した。内容は各論考で詳述しているが、「寛保の水害」を事例にして、被災状況、水害発生の仕組みや当時の治水技術、被災状況からの復興、幕府の災害対策、橋梁の建造技術や防災体制など、多方面から江戸の水害に取り組んでみたのが、今回のシンポジウムである。

水害史研究は、多くの事例調査と研究の蓄積とともに、さまざまな分析視角を必要としているのが現状であるといえる。このたびの試みが、その一助となれば幸いである。

シンポジウム開催にあたり多くの方のご尽力を得た。この場を借りて感謝申しあげるとともに、この成果に続く水害史研究のさらなる進展を心から願うばかりである。(文責 石山秀和)

## シンポジウム「江戸の水害―被害・復興・対策―」およびその関連事業

### 1. 2008年度 東京都江戸東京博物館 都市歴史研究室 シンポジウム

#### 「江戸の水害―被害・復興・対策―」

(1) 日 時：2009年3月14日(土) 13:30～17:00

(2) 場 所：東京都江戸東京博物館 1階ホール

(3) テーマ：「江戸の水害―被害・復興・対策―」

(4) 構 成

#### 開会の挨拶

- 小澤 弘（江戸東京博物館）

#### 個別報告

- 石山秀和（江戸東京博物館）「寛保水害における江戸の被災状況について」
- 橋本直子（葛飾区郷土と天文の博物館）「利根川の治水と東京低地の水害」
- 市川寛明（江戸東京博物館）

#### 「津軽藩江戸屋敷における寛保水害の被災状況と復興過程」

- 松村 博（㈱ニュージェック）

#### 「両国橋の構造と水防―寛保2年の流失と復旧工事」

- 田原 昇（江戸東京博物館）「寛保水害以後の幕府水防体制と「鯨船」」

#### ディスカッション

- 司会：石山秀和（江戸東京博物館）

### 2. シンポジウム関連パネル展示

#### 「東京の水害―川と人とのかわり―」

(1) 期 間：2009年2月24日(火)～3月22日(日)

(2) 場 所：東京都江戸東京博物館5階 常設展示室内第2企画展示室出口付近